BATTLE BALLER HARUKA

I −7

黒幕

Ψ

バトルボーラーはるか

第一集
バトルボール(神気珠玉)

第**7**章
黒幕

作･Ψ**(Eternity Flame)**

「師匠！」
「おぉ戻ったか、はるかよ。」
「うん。それで沙織と正友は？」
「うむ、毒の効果は消えた。２～３日も安静にしておれば元気になるじゃろう。」
「良かった…。」
はるかは、軽快な足どりで、嬉しそうに沙織と正友のベットに向かった。
「沙織、沙織…」
眠っている沙織を見て、体力が回復していないのを思い出し、囁(ささや)くように小さな声で名前を連呼してみると、沙織が目を覚ました。
「…ここは？」
「良かった…目覚めたのね！」
はるかは満面の笑みを浮かべ、沙織に抱きついた。次に正友のベットに向き、正友にも沙織にしたように、前屈みになって顔を覗(のぞ)き込むようにして名を呼び、意識が戻るのを待っていた。
「…ぅう…。」
正友の瞳が開いた。が、無事を祝うかのような笑顔のはるかを前に無言であった。
「正友、どうかしたの？」
虚(うつ)ろな瞳で沈黙している正友を、心配そうに見つめるはるか。
「…白か。」
「えっ！？何のコト？？？。」
「いや、お前のブラの色が。」
バキッ!!
「うげぇっ！？」
体力の衰えている沙織は、はるかと正友がそんなやりとりをしている間に、再び眠っていたが。正友も、はるかに殴られ気を失ってしまった。
「おいおい、あんまり無茶するなよ。」
「だってお兄ちゃん、正友がヤラしい事言ったんだもん。」
「まぁ病みあがりなんだから、手加減してやれよ。」
「あれ、気絶してる…!?」
「それ見ろ！後で謝っとけよ。」

「二人とも寝ちゃったね。」
「あぁ。一人はお前が気絶させたんだけどな。」
「もぉー。後で謝っとくからそれは言わないでよー…ところで話は変わるけど、ソロモン王の秘宝って、ホントに人を生き返らせたりする力なんてあるのかな？」
「うーん…分からないな。俺はもちろん、師匠でさえも秘宝の詳細については分かっていないからな。」
「ま、いっか。後、“女帝”って呼ばれてる人の事なんだけどね。」
「うん？…何だ？」
「それってリンシャンさんの事なの？」
「いや、違うな。それだけははっきりしている。」
「どうして分かるの？」
「…いいか、はるか。光ある所に影はあるって話はしただろ？」
「うん。」
「その意味は、お前という大きな力を持った存在には、それに対立する力もあるって事だ。そして、その存在はお前の身近にいる。」
「えっ！？身近な存在…？」
「そうだ。」
「どういう事？」
「戦争ってのはどうして起きると思う。」
「敵がいるから…かな。」
「まぁ、そういう事だ。若いお前には分からんだろうが、戦争ってのは平たく言えば、欲に目がくらんだ権力者達が互いの財産を奪いあって争う事。個人にそれを置き換えた場合、それは身近な存在同士での諍い(いさかい)だろ？」
「うーん難しくて分かんない…。」
「よく聞けよ！はるか。お前の立場で考えるなら、お前がソロモン王の秘宝を探し当てる重要人物だとして、それを狙うのは誰だ？」
「…分かんない。」
「お前の事を知ってる奴だろ。」

「…そうだね。でも、お兄ちゃんも、師匠も、正友だって知ってるわ…。」
「そこさ。光と影…秘宝があるからとか、それを探せる人物を知ってるとは言っても、くすねたり悪用しようとするのは本人の気持ち次第なんだ。なら、重要人物ってのを知るには、特殊な能力が必要になるだろ？俺達がお前を知ってるように。」
「…うん。」
「ならこの広い世界で、お前を見つけられたのは遠くの国の人だと思うか？」
「うーん。遠くの人じゃ難しいわね…。」
「だろ！結論を言うと、お前の身近にいる者で特殊な能力を持った人物の中に“女帝”はいるって事だ。」
「わたしの身近にいる人物…。」
「そう。更にその特殊能力を有する人物を中心として、ダークエンジェルズがその傘下(さんか)に引っ付いている。そういう事だ。」
「ダークエンジェルズって世界的な秘密組織って言ってたわよね？」
「あぁ。それがどうかしたか？」
「そんな巨大な組織が、なぜ一人の人間に支配されてるのかなって思って。」
「うーん…悪い奴らの考える事だからよく分からんが、狸(たぬき)と狐(きつね)の化かしあい的な物じゃないか。」
「どういう意味なの？」
「だから、従ったフリをして、情報を手に入れたら、土壇場(どたんば)で裏切るとか出し抜くとか。騙し(だまし)あいだな。」
「ならリンシャンさんも…？」
「お前と戦ったのは抜け駆けしたのか、指図だったのかは分からんが、裏で糸を引いてる奴がいるのは間違いないな。リンシャンさんは情報を知れば動き出すと見て、ワザと泳がせ、様子を伺ってた奴がいると思うぞ。抜け駆けしたつもりが、利用されてた。」

「何故、分かるの？」
「ずっと誰かが、ドコからか俺達を見てた。お前は戦ってたから分からんだろうが、誰かの気配を俺は確かに感じた。」
「…そうなの。」
「誰の差し金かまでは分からんが、仮にその命令を下してたのが“女帝”自身だったとしたら、相当の手錬(てだ)れって事だ。生半可な奴では、俺に姿を隠しきる程の強者に下っ端のような仕事をさせるなど出来ない。ひょっとしたら、ダークエンジェルズという結社(けっしゃ)全体が、女帝に怯えてるんじゃないだろうか。だとしたら、女帝はとてつもない使い手だという事になるな。」
「秘宝を餌にして、みんなを従わせてるかも知れないんじゃない？」
「そういう考え方もあるがな。しかし、それなら脅(おど)してあべこべに使えばいいだけのように思わないか？」
「うーん…お兄ちゃん。」
「なんだ？他に訊(き)きたい事があるのか？」
「うん。ひょっとしてお兄ちゃんって、女帝が誰なのか知ってるんじゃないの？」
「…。」
秀樹の鋭い分析力には周囲からも定評があったが、それ以外の何かを感じたはるかの問いかけに、秀樹は口を噤(つぐ)んだ。
「そこからは儂が話そう。」
「師匠…！？」
「前置きをしておくが、秀樹も儂もよく知っておる人物がおって、そやつを疑っておる。じゃが、事情があって確信は持てん。」
「誰なの？」
「“光と影”の話は聞いたじゃろ？」
「…うん。」
「お主らが持つ光。その地位と財産には、計り知れない価値がある。お主はそれを受け継いだワケじゃが。なら、お主がそれを受け継ぐ前は、誰がお主の特権を所有しておったと思う？」
「はっ！？ひょっとして…」

「お主の想像通りの人物じゃ。お主の敵とはな…先代の不死鳥(フェニックス)心拳正統伝承者かも知れぬと言う事じゃ。」
「じゃあ、前の伝承者は生きてるの？」
「うむ。生きておる。」
「どうしてその伝承者が生きてるのに、わたしが後継者に…？」
「“光と影”じゃ。」
「どういう意味なの？」
「“獅子身中(ししししんちゅう)の虫”という言葉を知っておるかの？」
「何ソレ？」
「ライオンは百獣の王と言われるが、その王も体の中にいる害虫や病に最後は体を蝕(むしば)まれ亡くなるのじゃ。この話が、どういう事を指しておるか分かるじゃろ？」
「つまりは前の伝承者自身に何か問題があったのね。」
「そうじゃ。お主は幼かったから、覚えておらぬかも知れんがのぉ。」
「誰の事なんだろ…？」
「自分を陥(おとしい)れるのは、他人ばかりではないという事じゃぞ。自分自身の中にも敵はいる。お主は道を誤るではないぞ。」
「その人は何か悪い事を企んで、伝承者の地位を失ったのね。」
「うむ、その通りじゃ。そして、その者はお主に恨みはないにしても、結果として、逆恨みして復讐しておるような形になっておる。それは、自分自身の蒔いた種の報いを、他人にぶつけ巻き込んでおるのじゃ。その種が新たな災いを呼ぶ。災いの連鎖。何とも悼(いた)ましい話じゃ。お主は同じ過ちを犯さぬでくれよ。」
「…うん。」
自分の先輩に中る人物。それが誰なのか知りたくはあったが、深刻そうな秀樹の顔つきと、自分を律せよという鮎吉の戒め(いましめ)に、はるかは襟(えり)を正されたような気持ちになり、それ以上話をすることができなかった。そして―

「今日はここまでにしときましょうか。」
私の意識に粉乃実、のマスターの声が入ってきたかと思うと、急に私は現実世界へと引き戻されていた。
「ここは…!?」
「気が付きましたか？」
「私は…一体？」
状況が把握できない私は、驚くばかりで落ち着きを失くしていた。
「どうしたんですか？」
「私は…ついさっきまで他と違う空間にいたんです。…それが急に…？」
「はるかを見ましたか？」
「えぇ…何故それを？…はッ！？」
目の焦点をマスターに合わせると、それは秀樹であった。
「あなたがリヴァィア（海竜）心拳の使い手の秀樹さんだったのですね。」
「えぇ、そうです。」という答えが返って来るものと思い込んでいたが、彼は私の言葉を否定した。その真意は分かりかねたが、何か訳があるのだと思ったので、そのまま流す事にした。
「マスターの事を忘れてたので、顔を見るまで分かりませんでした。」
「私の話によほど没頭していたようですね。」
「えぇ。まるで過去のはるか達の世界に、私の意識だけがタイムトリップしたような…はたまた、スゴくよく出来た夢を見ているようでもあり…。たまに私の意識が強くなる時があって、それが恥ずかしい事に、プロレスの実況解説みたいにスゴく熱が入って叫んでしまうんですよ。」
「不思議な感覚ですね。」
「えぇ、驚きました。」

マスターが言うには、マスターの言葉の力が、私の心をはるか達の記憶の世界へと導いたのだという。魂だけとなって飛び込んだ世界は、あらゆる壁を乗り超え、はるか達の戦いの日々を覗(のぞ)いていた。

心だけタイムトリップした私は、彼女達の心に同調する事により、激しくも厳しい人間ドラマの一場面に遭遇(そうぐう)すると、私自身も熱くなり、感情の昂(たか)まりを抑えきれなくなったのだろうと話を結ばれた。

そこで私は、マスターが話を切り出す前に言われた、“私の使命”を思い出し。まだ興奮している、自分の気を紛らせるかのように帰るなりに筆を走らせた。

はるか達の過去の回想シーンに私の感情も入り込み、読み辛くなるのではという危惧(きぐ)もあったが、それを除いてしまおうとすると、ペン先が鈍くなるような気がしたので、思うがままにして、一気に書き上げる事を念頭に置いた。

印象深いシーンに差し掛かると、その時の興奮が甦える。バトルボールは言葉に力が宿ると言うが、私の記憶を活字にする作業も、その法則にリンクしているかのようである。なので、私の心象も含んだ、このような形を取ったのだとご了承頂きたい。

その作業は、この終盤に至っても、未だ興奮するその気持ちに衰(おとろ)えはなく、むしろこれからの展開への興味が付加され、私は期待に胸を膨(ふく)らませ続けている。

これからどのような戦いが待ち受けているのか？紹介できる機会があればと願っている。

第一

集　完

バトルボーラーはるか
第一集 バトルボール(神気珠玉)
第7章
黒幕

http://p.booklog.jp/book/57820

著者：Ψ（Eternity Flame）　英　樹　（はなぶさ　いつき）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile
ブログ： http://profile.ameba.jp/jjmmd123/

編集：Ψ　（Eternity Flame）　秋乃空 （あきのそら）
ブログ：http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへ
http://p.booklog.jp/book/57820

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/57820

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ